

目的 今後わが国は更なる技術革新と、高度情報化社会、国際化社会、超高齢化社会を迎える。それは人間生活のあらゆる面に大きな影響をもたらし、ライフ・スタイルも大きく変貌させたであろう。家庭科教育に携わる者は、そうした時代の変化に単に追従するのではなく、主体的に新しい時代にふさわしい人間生活のありようを提示しようとする家庭科教育の創造を目指さねばならない。そのための基礎資料の一つとして高校生の家庭科学習に関する意識調査を実施した。

方法 1987年10月～12月にかけて、京都・大阪・奈良・兵庫の公立高校2年生の男女100名ずつ、計800名を対象に、調査用紙を配布し、選択肢を中心とした回答による意識調査を実施した。

結果 小・中・高校と体験して来た家庭科学習の学校教育全体の中での印象度は、必ずしも強くない。これは学歴社会がもたらした受験競争の影響とも考えられようが、むしろ楽しく充実した学習のあったことも事実である。中でも調理実習に関してはいくつと小学校で66.1%、中学校で55.7%、高校で40.4%と最も強い印象を残したことを示し、次いで被服製作・手芸と答えている。家庭や職業、結婚、育児、男女の役割分担など従来の考えをうけながらも新しい認識が生れつつあり、21世紀には家庭もまた家庭に対する意識の面でもかなりの変化が予想される。最新の科学機器などを導入した新しい時代の生活技術の習得とともに伝統的な生活文化の見直しも忘れてはならない。生活観や職業観、育児や教育、超高齢化社会を迎えての生涯学習や福祉の問題など広い視野からの見直しが不可欠である。